

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第21回 第6.2.8節～第6.2.10節

2018年11月1日

小田 勝

172頁「6.2.8 二重否定」。言うまでもなく、漢文訓読体における二重否定は、強い肯定を表すが、そのことを注記すべきだった。

- ・奏する所の詩歌、いづれもいづれも祝言しうげんにあらざるはなし（＝祝言ナリ）。（保元・金刀比羅本）

173頁、用例(14)の類例をあげる。

- ・草枕旅にしをれば刈り薦こもの乱れて妹いもに恋ひぬ日はなし（万 3176）
- ・花咲かぬやどの梢もなかりけり都の春は今さかりかも（風雅 161）

「ないものはない」は、「すべて存在する」の意である。

- ・御前の（＝御前駆ニハ）、…京なるは、四位、五位、なきなし。（うつほ・蔵開下）
- ・家の内になきものなくてある人なむ、行く先頼もしき。（うつほ・祭の使）

近世の例であるが、西鶴の有名な「人はばけもの、世にないものはなし。」（西鶴諸国ばなし）も同様。次例は、現代語の「なくはない」と同様の表現である。

- ・春の田をまかする人はなくはなく（＝有ッテ）かへすがへすも花をこそ見め（出羽弁集）〈参考「春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな」拾遺 47〉

「…ずもなし」「…ずはなし」は和歌にみる表現で、「…ないわけではない」の意である。

- ・同じくはあれないにしへ思ひ出でのなければとても偲おもばずもなし（新古今 1779）
- ・庭の雪あとつけじとは思へどもとひこん人は待たれずもなし（延文百首）
- ・はかなさを思ひ知らずはなけれどもあらまし（＝期待）にのみ日を暮らすかな（堀河百首）

用例(16)は三重否定の例。二重否定の反語形も三重否定である。

- ・さのみやは面影ならで見えざらむ雲居の花に心とどめば（頼政集）〈「面影デナクテモ見エル」ノ意〉

同頁「6.2.9 修辭否定」。次の結句は意表を突いている。

- ・朝な朝な雪のみ山に鳴く鳥の声におどろく人のなきかな（秋篠月清集）

174 頁「6.2.10 否定と限定」。次例は、用例(1)の類例である。

- ・なぐさめに煙ばかりは絶たねども (=煙ダケハ絶ヤサナイガ) さびしきものを冬のすみかは (後鳥羽院御集)

二重否定「羨ましくなくはない」は「羨ましい」の意であるが、

- ・法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。(徒然1)

のような「…ばかり…ず(なし)」は「…ほど…であることは他にない」、つまり「…が最も…である」の意を表す。上例は「法師が最も羨ましくない」の意である。以下、類例をあげる。

- ・人の亡きあとばかり悲しきはなし。(徒然30)
- ・命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。(徒然7)
- ・ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ふを(徒然21)
- ・今日ばかりあはれと見ゆる空はあらじわが身も秋も暮れぬと思へば(秋風和歌集)
- ・まだ知らぬ所までかく来てみれど桜ばかりの花なかりけり(風雅164)
- ・月影に幾春経てか花も見し今宵ばかりの思ひ出ぞなき(中務内侍日記)

次例は、「駿河の清見が関と、逢坂の関とばかり [アハレナル所] はなかりけり (=駿河ノ清見ガ関ト逢坂ノ関トガ最モ印象ニ残ッタ)」の意である。

- ・ここらの (=多クノ) 国を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。(更級)

指示語の付いた「…ことはなし」の構造にも注意。例えば、現代語で、a に対して、b は「一番面白い」の意である。

- ・ a 面白いことはなかった。
- ・ b こんなに面白いことはなかった。

古典文の下例は、上例 b の意になっている。

- ・伏見 [ノ俊綱ノ山荘] には山道を造りて、しかるべき折節には、旅人をしてて通されければ、さる面白きことなかりけり。(今鏡)

これで「第6章 肯定・否定」の補遺稿を終える。次回からは「第7章 推定・推量」に入ることにする。

[出典追加] 秋風和歌集①藤原光俊(真観)(1203-1276)撰③新編国歌大観 6